中学校キャリア教育における「学びのレリバンス意識」を高める実践の開発

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野　中島範隆

1. はじめに

学校における学びを生徒の将来や社会とどうつなげていくのか。学校教育にはその答えを実践として明らかにしていくことが求められている。現行の学習指導要領では育成すべき資質・能力の三つの柱のうちの１つとして，「学びに向かう力，人間性等」が設定されており，「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」と表現されている。総則において「キャリア教育」という言葉が初めて位置づけられたことからも，学校教育における学びの意義を将来や社会との関連性に見出そうとする意図が垣間見える。そのような意図の根本には，藤田（2014）が指摘しているように「日本の子どもたちの脆弱な学習意欲」が「『学校での学習』と『自分の将来』との断絶の現状」に起因するとの見立てがあるのだろう。

本研究では，キャリア教育からその解決の糸口を見いだすために「レリバンス」に着目した。一般的に「関連性」や「有意性」などと訳されたりする「レリバンス（relevance）」を，キャリア教育研究者の本田由紀は，「即時的レリバンス」「市民的レリバンス」「職業的レリバンス」の３つに分類している（本田 2005）。このうち「即時的レリバンス」を除く二者はいずれも将来との「関連性」「有意性」を示すものであるが，「市民的レリバンス」は個人と関連するのに対して，「職業的レリバンス」は社会が期待する有効性を表す。いずれもキャリア教育には重要なものだが，本研究が対象とする中学生は就業まで時間的に隔たりがあるため，個々のキャリアに結び付けて有用性を考える「職業的レリバンス」は，生徒の実態には合わないと思われる。

そこで，本研究では，国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)（以降，「第二次報告書」）が小学校から高校までのキャリア教育の実態やキャリア意識について調査・分析する際に採用した「学びのレリバンス意識」を用いることとした。これは「児童生徒が学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える意識」と定義されており，その意識のあり方は 3 つの調査項目に集約される。

- 「今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えている」
- 「学校の勉強は普段（ふだん）の学校生活を送る上で役に立つと思う」
- 「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」

今年度の研究は昨年度からの継続研究でもある。中島(2022)では，生徒が現在の生活や学びを自分の将来とつなげて考える意識を高めることには一定の成果を得た。一方で，学校内や学校外の生活や学習に実際に結びつけようとする意欲の高まりに関しては課題が残った。「レリバンス」の一般的な意味に引きつけていうなれば，「関連性」については満たしたものの，「有意性」を満たすことができなかった。「学びのレリバンス意識」の２つ目の質問と３つ目の質問がそれに当たるであろう。本研究では生徒が将来や社会と関連させる学習意欲をこの「学びのレリバンス意識」としてとらえ，中学校キャリア教育の実践を通して，その向上を目指す方策を考えていく。

2. 目的

本研究では，生徒の「学びのレリバンス意識」を向上させる実践プログラムを開発し，その効果を検証することを目的とする。

3. 方法

(1)「学びのレリバンス意識」を高める実践プログラムの開発と実践

対象校　山梨県公立中学校
期間　　令和５年７月～12 月
生徒　　中学３年生 １学級（29 名）
「学びのレリバンス意識」と対応させた実践プログラムの開発（以下の①～③で構成）
①現在の学校内外の生活のつながりを記述させる実践
②自己分析した「基礎的・汎用的能力」を行事や生活と関連づける実践
③職業を知ることで将来イメージを豊かにする実践

(2)実践プログラムの効果の検証

①「学びのレリバンス意識」の事前・事後の比較（質問紙調査）と生徒への聞き取り調査
②「基礎的・汎用的能力」の事前・事後の比較（質問紙調査）

4. 結果と分析

(1)「学びのレリバンス意識」を高める実践プログラムの開発と実践

①現在の学校内外の生活のつながりを記述させる実践（以下，実践プログラム①と略す）

学校内外のつながりを意識させるために，昨年度開発したワークシート，「将来につながる『キャリアの種』を見つけよう！」を活用する実践（以降，「キャリアの種」実践と略す）とその導入のために開発した道徳授業を行った。

「陽子さんのキャリア相談」は，ひらた・鶴田(2006)にある資料で，筆者が題名を変更したものである。主人公が，パティシエの職業につくという念願が叶い就職しながらも転職するようになった顛末をキャリア・カウンセラーの立場から構成した資料である。しかし軽々しく転職しないという教訓的な勤労観の学びではなく，職業には「専門的知識・技能」だけでなく「汎用的な知識・技能」が必要であり，現在の生活で培っていることにも将来につながるものがあることに気づかせることもできる優れた教材であると考えた。「中学校時代の陽子さんに，どんなアドバイスをしますか？」「同じように中学生の自分にアドバイスを送るとしたら，どんなアドバイスをしますか？」という質問には，様々な記述がみられ，思った以上に生徒たちは将来につながる汎用的な能力に気づいていたことに驚かされた。授業後の感想でも，「将来の夢を叶えるために中学校で身につけられるものが意外にたくさんあってびっくりした」など，授業のねらいにそった多くの記述が見られた。

授業終了後，帰りの会前の時間 10 分程度を使って，１週間「将来につながる『キャリアの種』を見つけよう！」シートに記述させる実践を行った。生徒たちは授業内での学びや部活動，防犯安全講話など学校内でのことだけでなく，外食時の体験や地域のゴミ拾いイベントなど学校外での体験についても将来につながるものとして記録していた。

生徒が発見した学びや気づきにはそれぞれ名前をつけ，「キャリアの種」として一覧にして，その後のプログラム実践でも活用した。

②自己分析した「基礎的・汎用的能力」を行事や生活と関連づける実践（以下，実践プログラム②と略す）

実践プログラム①で生徒が発見した資質・能力は生徒なりに将来との「関連性」が考えられているとはいえ，学びの「有意性」についての認識は充分とはいえない面がある。そのため，「分野や職種にかかわらず，社会的自立に向けて必要な基盤となる能力」（中央教育審議会，2011）として提示された「基礎的・汎用的能力」を用いて妥当性を確保したうえで，生徒がこの能力の成長を自覚することを通じて，学校における学びの「有意性」への意識が高まることを期待した。また，「基礎的・汎用的能力」の測定

にあたっては，先行研究でも多く使用されている文部科学省(2011)の「キャリア教育アンケートの一例」を用いた。

9月に入ってすぐの学活の時間に，生徒が「基礎的・汎用的能力」を自己分析する授業を行った。まず授業の始めに，「基礎的・汎用的能力」について簡単な紹介をした。生徒自身が伸ばす対象となる能力についてあらかじめ知っておくことが，効果を高めると考えたからである。その後に，「自分の『基礎的・汎用的能力』はどうなっていると思うか」と質問した。予想後に，測定した結果を配布し，セルフイメージと実際のズレを認識しやすくなるよう工夫した。学活の後半では，「学園祭で必要になる資質・能力は何か」，「学園祭で発揮したい資質・能力は何か」，「学園祭で育てたい・伸ばしたい資質・能力は何か」の3つの質問について考え，その回答を基に資質・能力に着目した学園祭の目標をたて，キャリアパスポートに記入させた。学園祭後の学活では，その3つの項目が実際にはどうであったか個人で振り返った。授業感想では，行事の有用性に対する意識の高まりが見られた「*学校行事ではたくさんの力を得られることを知れて楽しかった*」といった感想や「*社会にでるとき必要な能力をみて自分ができること，できないことを分析しながら決めたからどんなことが得意，不得意かがわかりやすく，目標が決めやすかった。*」と資質・能力の自己分析の有効性に関する記述が見られた。

また，12月に2回目の測定を行い，プログラム全体を終えた後の学活で再度生徒に自己分析をさせた。事前・事後の結果をレーダーチャートで重ねることによって，生徒が把握しやすいようにした（図1）。レーダーチャートを見ながら自身の変容について把握し，変化した要因について自己分析を行った。

実践プログラム①の「キャリアの種」実践を学校生活の中に位置づけ，実際に発見した資質・能力を実際に身につけることにつなげるため，昨年度開発したワークシートを「将来につながる『キャリアの種』を育てよう！」（以降，「キャリアの種」実践Ⅱ）に発展させた。基本

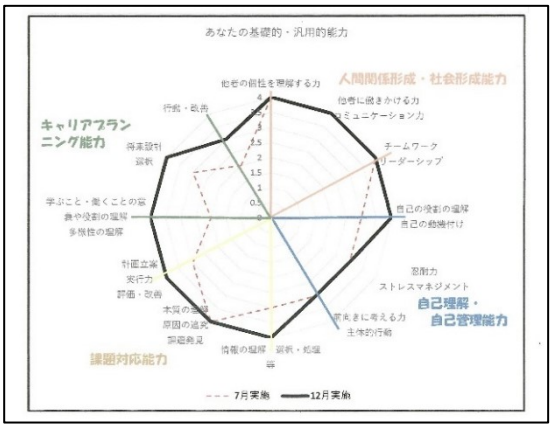

図1　ある生徒の「基礎的・汎用的能力」レーダーチャート

となる様式は大きく変えていないが，自分が伸ばしたい資質・能力を設定し，それを育てるための手立てを書く「イメージシート」を加えた。この実践では，「基礎的・汎用的能力」だけでなく，実践プログラム①で生徒が発見した「キャリアの種」も身につけたい資質・能力の対象とした。「キャリアの種」実践Ⅱは，12月中旬の帰りの会前の10分程度を用いて1週間行った。週末の休日も翌週の月曜日に記入した。

表1はある生徒の「キャリアの種」実践と「キャリアの種」実践Ⅱでの英語の授業を対象とした記録である。この生徒は「将来設計（する力）」を伸ばしたい資質・能力のひとつに設定してこの取り組みを行った。「キャリアの種」実践時に比べると，より自分の将来や職業とつなげようとする意識が高まった様子が窺える。

表1　ある生徒の記録の比較

「キャリアの種」実践での記録	英語の授業で minutes や be full of ～など日常生活で使えそうだと思った。外国に行った時や外国の友人ができた時に会話で困ることが少なくなるといいなと思った。
「キャリアの種」実践Ⅱでの記録	英語の授業で，将来英語を使う職業にも興味があるから，将来設計を意識して取り組んだ。具体的には，この文はこの場面で使えそうだなとか先生の話を聞いて考えたりした。（中略）どんな時も将来を意識して受けたいと思った。色々なことを積極的に調べていったら将来設計の力が伸ばせそうと思った。

③職業を知ることで将来イメージを豊かにする実践（以下，実践プログラム③と略す）

昨年度の研究では，生徒の職業知識の不足や自分の将来とのつながりを思い描けない生徒の存在が課題となった。そこで，職業知識を増やしたり，将来のイメージを豊かにしたりすることで，学校での勉強を将来の仕事の可能性に関連させる「学びのレリバンス意識」が高まると考えた。実践プログラム③は，「職業的な興味・関心を探る授業」,「職業について知る実践」,「大人トーク（キャリア・インタビュー）」,「キャリアプランニングの授業」の４つで構成した。

中学生のキャリア発達段階を考えると，「どの職業に就くか」という職業選択よりも「どうしてその職業に就きたいのか」という職業的な興味・関心を掘り起こし，広げていくことが重要だと考えられる。そこで，10 月の総合的な学習の時間に職業的な興味・関心を自己理解するための授業を行った。授業では，まず現在に至るまで関心を持った職業を列挙してもらい，それらの職業の共通点を考えてもらった。その際、具体的な職業が思い浮かばない生徒を含め，全員が取り組めるように埼玉県中学校進路指導研究会（2012）にある「職業に対する興味・関心」を基に作成したワークシートも併せて用いた。このワークシートは,「多くの人と一緒にする仕事が良い」/「自分だけでする仕事が良い」のように対になる 2 項目が対置された設問が 10 個記されており，どちらがより自分の希望に近いかを考えていくものである。これによりどの生徒も自分の職業的な興味・関心を知ることができた。そして，ここで自覚した職業的な興味・関心に基づいて次の職業調べに移った。

職業調べは「キャリアアップウィーク」と銘打って，朝読書の時間 10 分を使って 5 日間行った。書籍でも，タブレットを用いてインターネットで調べてもよいこととした。もともと「服飾デザイナー」になりたいと考えていた男子生徒は，職業調べを通して「縫製業」,「パタンナー」,「アパレルバイヤー」,「ファッションプランナー」,「テキスタイルデザイナー」について調べ，職業知識を増やしていた。さらに，将来なりたい職業がなかった別の男子生徒は既習の「職業に対する興味・関心」のワークシートを手掛かりに，「人に会うことが少ない仕事」・「物を相手にする仕事」・「自分だけでする仕事」を自身の職業的な興味・関心に位置づけ，「消防士」,「トリマー」,「消防士」,「看護師」,「保育士」について調べていた。職業調べ後の自由記述式の感想では，「*調べている時に似た職業が何個もあって，進む道が広がった*」など将来の職業選択の可能性の広がりを感じさせる記述が見られた。

11 月下旬の総合の時間では 2 時間連続でキャリア・インタビューを行った。社会経験の豊かなゲストティーチャー（以降，GT）を招き，それまでの実践プログラムでの学習を総括するねらいで,「大人トーク」（石川，2012）を参考にして担任との対談形式の授業を行った。

対談では，生徒がこれまで実践プログラムで考えてきたことをなぞるようにして質問を行った。例えば，生徒が職業的な興味・関心を知る授業で使った 10 個の項目をそのまま質問に用いて，GT の職業的な興味・関心と実際選択した職業との関連について生徒と一緒に考えた。他には,「社会で必要な資質・能力は何か」という質問に答えてもらう時には,「基礎的・汎用的能力」の中の 4 能力をランキングにしてもらったり，生徒たちが実践プログラム①の活動で発見した「キャリアの種」の中から重要なものをトップ 3 の形で選んでもらったりした。それ以外にも，中学校の時に取り組んでいてよかったことを聞くことで生徒の「学びのレリバンス意識」を高めることを意図した質問も行った。ちなみに，対談全体の進行は GT の生い立ちから退職まで時系列に沿って聞く構成としたが，これは生徒が次時に取り組むキャリアプランニングの授業で用いるワークシートと関連性を持たせたためである。このように生徒の学習の連続性や関連性を強く意識することで生徒の学びの深化や意識づけの強化に効果が見られるのではないかと考えた。

翌週の学活では実践プログラム③の最後の授業として，自分の将来設計を考えるキャリア

プランニングの授業を行った。厚生労働省(2012)を参考にして，職業上のキャリアだけでなく，家庭生活や市民生活も視野にいれたワークシートを作成した。生徒たちは中学卒業後からのキャリアプランを職業だけにとらわれず多面的に考えていた。

(2)実践プログラムの効果の検証

①「学びのレリバンス意識」の事前・事後の比較（質問紙調査）と生徒への聞き取り調査

質問紙調査は，自己の将来像や学校生活や授業の意欲などキャリア意識に関する 9 つの質問と「学びのレリバンス意識」を問う 3 つの質問で構成した。これを実践プログラムの事前と事後に行った。実践プログラムを実施したクラスは 1 クラスだけであるが，質問紙調査は対象となる 3 学年全 5 クラスで実施した。なお，質問紙調査は，プログラム実施クラス以外では 6 月 26 日と 11 月 29 日に，プログラム実施クラスでは 7 月 11 日と 12 月 8 日に実施した。

昨年の研究成果として，中学生のキャリア形成は学校内外の生活をシームレスに行われていることが明らかになったため，学校での学びのみを対象としていた「第二次報告書」における「学びのレリバンス意識」に関する質問文を以下のように変更した。

a「今学校内外で学んでいることや経験したことと自分の将来とのつながりを考えている」（以降，「a つながり」）

b「学校内外で学んでいることや経験したことは普段の学校生活や日常生活を送るうえで役に立つと思う」（以降，「b 役に立つ」）

c「学校内外で学んでいることや経験したことは将来の仕事の可能性を広げてくれる」（以降，「c 可能性」）

さらに，質問 a の回答が「第二次報告書」では 3 件法であったものを他の質問にあわせて 4 件法に変更した。

「第二次報告書」では，質問 a について「よくしている」・「時々そうしている」と回答したもの，質問 b と質問 c に「あてはまる」とそれぞれ肯定的に回答した数を数え（最大 3 個，最低 0 個）、その個数によって「学びのレリバンス意識」を階層化して分析を進めている。以降，上記の質問 a～c の肯定的な回答の個数を「該当個数」と省略して記述し、本研究でも，「該当個数」を「学びのレリバンス意識」の高低と捉えて考察を進める。

図 2 は「該当個数」について事前と事後で比較したものである。7 月の段階では，「該当個数」が 2 個以上の生徒の割合が，実践実施学級とその他の学級のいずれも全国規模の調査である「第二次報告書」の 63.4%を下回っていた。11 月の調査では，プログラムを実施していないその他の学級が 11.2%の上昇に留まったのに対して，プログラムを実践した実践実施学級では 21.2%上昇した。この変化をクラス別に見ていく(表 2)。

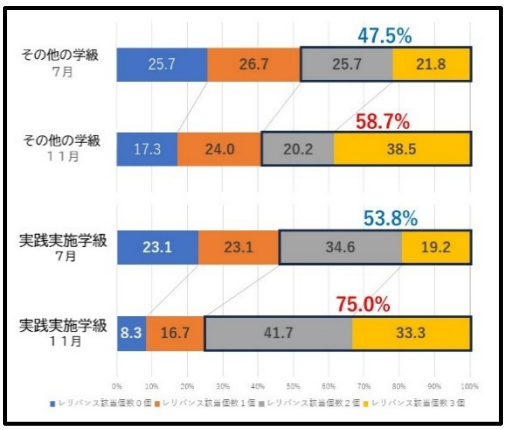

図 2　「学びのレリバンス意識」の事前・事後の比較

表 2　「該当個数」が 2 個以上の生徒の割合の学級別比較

	該当個数 2 個以上の生徒の割合		増減
	7 月	11 月	
学級 A	52.4%	46.2%	-6.2%
学級 B	40.7%	51.9%	+11.2%
学級 C	50.0%	50.0%	±0%
学級 D	53.8%	85.2%	+31.4%
実践実施学級	53.8%	75.0%	+21.2%

まず目を引くのが学級 D である。プログラムを実践していない学級だが，実践実施学級以上に「学びのレリバンス意識」が大きく向上している。この要因については，後述する聞き取

り調査のところでその一端を明らかにする。それ以外の学級では，「該当個数」が 3 個あるいは 2 個の群が 50%程度に留まっている。また，11 月になって数値が低下した学級も 1 学級あった。さらに，その他の学級では，該当個数が 0 個の生徒の数が増えた学級が 2 学級あった。日常的な参与観察の結果も踏まえると，学級 A～C は，対象校における通常の教育課程や学級経営の代表的な成果を表したもので，学級 D と実践実施学級は，それ以外の特別な要素が影響した結果だと考えられる。

次に，「学びのレリバンス意識」の項目別の変化を見ていく。表 3 は項目別の平均値を実践実施学級とその他の学級で比較したものである。実践前の数値を見ると，「学びのレリバンス意識」の中でも「a つながり」に課題があることが顕著だが，11 月には実践群と非実践群いずれも数値が上昇していた。表 3 からは実践プログラムの効果はあまりないように見えるが，「学びのレリバンス意識」に特異な変化が見られた学級 D を除いた表 4 を見ると，「a つながり」や「c 可能性を広げる」においては上昇値に差が出ていることがわかる。ここまでの結果から，本実践プログラムは，「a つながり」の向上を促進する効果が最も高い可能性があるようだ。一方で，「b 役に立つ」という意識にはあまり効果がないことも窺えた。

表 3 「学びのレリバンス意識」の項目別の変化

実践実施学級	7 月	11 月	増 減
a　つながり	2.85	3.19	+0.35
b　役に立つ	3.38	3.42	+0.04
c 可能性を広げる	3.35	3.54	+0.19

その他の学級	7 月	11 月	増 減
a　つながり	2.81	3.09	+0.27
b　役に立つ	3.30	3.38	+0.08
c 可能性を広げる	3.35	3.42	+0.12

表 4 「学びのレリバンス意識」の項目別の変化Ⅱ

その他の学級（学級Dを除く）	7 月	11 月	増 減
a　つながり	2.83	3.00	+0.17
b　役に立つ	3.27	3.30	+0.03
c 可能性を広げる	3.25	3.29	+0.04

さて，ここまで量的データによって効果を検証してきたが，生徒の聞き取り調査によって質的データの側面からも検証をしていく。

聞き取り調査では，望ましい効果が見られた要因を探るために，学級 D と実践実施学級の生徒で，「a つながり」の回答が 2 段階上昇していた生徒 8 名を対象に聞き取り調査を行った。学級 D では，該当生徒が 5 名であった。調査から 3 つの要因が明らかになった（表 5)。進路決定が目前に迫る中学 3 年生という時期を考えると，高校入試をきっかけに意識が向上することは想定されるものであった。ここで興味深いのは，将来のことについて親と会話をするようになったという 2 人の生徒の事例である。身近な人と将来のことを話す機会を持つことが子どもの「学びのレリバンス意識」を高めるかもしれないという仮説は，教師のキャリアカウンセリングの必要性を裏付ける一要素になるかもしれない。

しかし，これだけでは学級 D 全体の向上を説明するには不十分である。そこで，学級担任の T 教諭に「学びのレリバンス意識」が向上した要因について聞き取り調査を行った。T 教諭は「理由はよくわからないですが」と前置きした上で，年間を通して自主学習の提出に力を入れてきたこと，また学級生徒会の取り組みで継続的に自主学習の充実を目指した取り組みをしてきたことが関係するのではないかと推測していた。生徒への聞き取り調査の中では，それらに言及した事例は確認できなかったが，担任による学習の充実に関する取り組みや生徒の自治的な活動が学習に対する意味づけを深めたり，学習に対する肯定的な感情を涵養したりするのかもしれない。少なくとも学級 A～学級 C では同じような上昇が見られなかったことから推測すると，学級 D の上昇を単に高校入試による進路意識の高まりだけに帰結させるのは適切ではないと考えるのが妥当だろう。

表 5 「学びのレリバンス意識」の上昇要因（学級 D）

上昇した要因	実際の回答例
進路決定をきっかけとするもの	*・受検や高校のことを意識するようになったから。* *・入試が近づいて，高校卒業後に何がしたいのかなと少し考え始めた。*
親との会話	*・2 学期になって「将来何になりたいの？」と両親から聞かれることが増えた。* *・1 学期は勉強と将来のつながりなんて考えてなかった。最近自分が目指す職業に就くにはどうするのがいいか親からアドバイスをもらい，考えるようになった。*
将来必要な資質・能力への気づき	*・今学んでいる「人間関係」をイメージした。大人になった時に人とのコミュニケーションしている時に生かせるなと思うようになった。*

実践実施学級は 3 名の生徒が該当した。3 名の生徒はいずれも，「学びのレリバンス意識」が上昇した理由として実践プログラム①～③の中のいずれかの授業を挙げており、実施プログラムの有効性を支持する回答が得られた（表 6）。しかし，実践プログラム①～③と「学びのレリバンス意識」（a～c）との対応関係については，3 名の聞き取り結果と質問紙調査を比べたデータからは対応関係があるように思えるが，3 名とも「b 役に立つ」や「c 可能性を広げる」を伸ばすことを意識したプログラムも「a つながり」の意識を強めたと認識していることがわかった。そのため，実践プログラム①～③と「学びのレリバンス意識」（a～c）の対応関係を明らかにすることはできなかった。

表 6 「学びのレリバンス意識」の上昇要因（実践実施学級）

生徒	回答内容
男子生徒A	*11 月につながりに関する意識が強まった。きっかけは「キャリア・インタビュー」とキャリアプランニングの授業を受けたこと。*
男子生徒B	*前まで将来のことを考えたことがなかったけど，最近「キャリアの種」や仕事のことを調べたりして，勉強することは将来につながっているのかなと思うようになった。*
女子生徒C	*今まで勉強では将来使わない知識ばっかじゃんと思っていたが，資質・能力の授業を受けて，行事とかに目を広げると，資質・能力が伸びたりして，意味があるんだなと感じるようになった。*

最後に，実践プログラムの効果が見られなかった要因について見ていく。実践後の質問紙調査ではほとんどの生徒の「学びのレリバンス意識」が向上し，肯定的な回答で占められていたが，女子生徒 D だけは「a つながり」と「b 役に立つ」が「2 どちらかと言えばあてはまらない」に留まった。その理由を聞いてみると，「a つながり」に関しては，実践前は「1 あてはまらない」を選択しており，「*キャリアの種を通して，授業内でつながることを考えるようになったが，英語以外はそんなに将来につながらないと思った*」と述べていた。「b 役に立つ」についても同様に英語以外について役に立つようには思えないと答えていた。プログラムが効果的でなかった理由を尋ねると，「*一般的な仕事だとつながりもわかりきっていて意欲がわかない。特別な仕事に広げて知ると，授業とのつながりが見られるんじゃないかな*」と回答した。この回答から，この女子生徒 D にはある程度の職業知識があり，キャリア教育に対するレディネスが高いため，効果を実感しにくかったのかもしれない。ただ，キャリア・インタビューで GT が話した「*5 教科の勉強はすべての土台。それがあれば就職でも自分のやりたいところなどどこにでもいける*」という言葉に感銘を受け，勉強はあくまで高校に行くための手段という考えを改めるようになったとも述べ，プログラムの一定の成果を見てとることもできた。

②「基礎的・汎用的能力」の事前・事後の比較（質問紙調査）

はじめに，「学びのレリバンス意識」と「基礎的・汎用的能力」との関連について，本研究からわかったことをまとめる。

事前調査の結果から，「学びのレリバンス意識」の「該当個数」別に基礎的・汎用的能力の 4 能力の平均値を見ていくと，「学びのレリバンス意識」の「該当個数」0 個のグループは，４能力すべてにおいて平均値が最小値となった（図 3）。このことから，少なくとも対象校においては「学びのレリバンス意識」が低位に置かれた生徒は，将来必要となる資質・能力を伸

ばし損ねてしまう可能性があることが示唆された。

「学びのレリバンス意識」評価値数	人間関係形成・社会形成能力		自己理解・自己管理能力		課題対応能力		キャリアプランニング能力	
3	3.67	(3.54)	3.00	(3.10)	3.40	(3.13)	2.87	(3.15)
2	3.59	(3.68)	3.07	(3.04)	3.33	(3.20)	3.15	(2.92)
1	3.44	(3.49)	3.17	(2.91)	3.33	(3.06)	3.22	(2.83)
0	3.11	(3.33)	2.50	(2.89)	2.83	(2.86)	2.28	(2.47)

※（　）内の数字は実践実施学級以外の４クラスの平均値

図３　「基礎的・汎用的能力」と「学びのレリバンス意識」との関連性

次に,「基礎的・汎用的能力」の実践前後の調査結果を比較すると,実践実施学級と学級 D では,「基礎的・汎用的能力」のすべての能力の数値が上昇していた。一方，学級 A～C では，実践後の数値が実践前より下回った能力がいくつか見られた。プログラムの実施の有無は別としても,「学びのレリバンス意識」が大きく向上した２学級において,「基礎的・汎用的能力」の向上が見られており，相関があることが窺える。さらに、実践実施学級の事後の数値を見ると，「人間関係形成・社会形成能力」と「キャリアプランニング能力」において数値の上昇率が高い。前者の「人間関係形成・社会形成能力」に関しては，学級経営や特別活動の影響も想定されるので，一概にプログラムの効果とは言い難い面があるが、後者の「キャリアプランニング能力」は，実践プログラムの活動のねらいと重なるところが多く，同プログラムの効果と見做してもよいのではないかと思われる。

5. 最終考察

本実践プログラムによって，特に将来とのつながりを考える意識の向上を促進する効果が高いことがわかり,「学びのレリバンス意識」の向上に一定の成果が見られた。さらに,「基礎的・汎用的能力」では，特に「キャリアプランニング能力」への効果があることも示唆された。

課題としては,「b 役に立つ」意識の向上に効果が見られなかったことが挙げられる。生徒にとって「役に立つ」というのは「将来役に立つ」という意識に回収されることが多く，普段の生活のように「現在に役立つ」という意識にはあまりならないことがわかった。本田のレリバンス概念に立ち戻ると，本田が現在を対象とした「即時的レリバンス」は学ぶことの楽しさや喜びのような感情にフォーカスしたものであり，役に立つという意識とは異なっている。現在的な「レリバンス」に関して,さらなる検討が必要かもしれない。

最後に，今年度の研究でも授業内での学びと将来とのつながりをさらに深める必要性が課題となった。英語以外の教科では将来とのつながりが感じられないと言っていた女子生徒 D さんの言葉が端的にその課題を言い当てている。授業あるいは教科における「レリバンス」をどう高めるかというところがやはり“本丸”となるのかもしれない。

参考文献

藤田晃之(2014) キャリア教育基礎論，実業之日本社

ひらたつまびらか・鶴田麻也美(2006) キャリア教育と授業プログラム : 自分らしさを発見する授業，日本標準

本田由紀(2005) 若者と仕事 :「学校経由の就職」を超えて，東京大学出版会

石川晋(2012) 「対話」がクラスにあふれる！国語授業・言語活動アイデア 42，明治図書

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021) キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書 nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/pdf/2nd_ver_all.pdf 【2024/1/6 最終閲覧】

厚生労働省(2012) 中学校・高校におけるキャリア教育実践テキスト，実業之日本社

文部科学省(2011) 中学校キャリア教育の手引き，教育出版

文部科学省(2018) 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編，東山書房

中島範隆(2022) 中学校 特別活動における「自己実現」の視点に立った生活記録の工夫 : キャリア形成に向けた学びの意味づけを目指して，山梨大学教職大学院令和 4 年度教育実践研究報告書

埼玉県中学校進路指導研究会編(2012) 学級活動を核とした中学校キャリア教育，実業之日本社

中央教育審議会(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申） https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf 【2024/1/7 最終閲覧】